

# 横浜国立大学大学院 工学研究院の 2012年度の活動を ふりかえって

前工学研究院長 石原 修



2012年度の工学研究院・工学府・理工学部的主要な動きを振り返ってみます。

2011年4月に誕生した理工学部では三度目の入学試験が行われました。これまで理工学部の前身である工学部の一般入試を引き継ぎ後期試験でより多くの入学者を受け入れていましたが、初めて前期試験でより多くの入学者を受け入れることにしました。その結果一般入試志願者数は4,343人と大幅な伸びを示し、3年目を迎える理工学部が社会的にも大きく認知されていることを裏付けています（過去の志願者数は4,011（2011）、4,211（2012））。それに加えて今年度入試の特徴は女子学生の増加であり、理工学部入学生全体に占める女子の割合は19.3%となりました。これは工学部時代の10%程度に比して目立った違いとなっています。

学部および大学院の教育改革の一環として工学基礎研究棟をES（煙洲）タワーと名称を変え、理工学部・工学府における英語教育等の設備を導入しました。また対外的には国立大学53工学系学部長会議に大学連携推進委員会を設置し、工学系学部間の連携と新聞社（読売、朝日、日経）との連携により、理工学に対する啓蒙活動に取り組みました。文部科学省主導で全国の国立大学に対して行っているミッションの再定義に対しては、横浜国立大学工学系は博士課程前期から後期への進学と、後期課程の定員状況から、研究を中心に据えた教育を行っていることを明らかにしました。また2007年に立ち上げて、昨年度定員増が認められたPEDプログラムが、「 $\pi$ 型技術者・研究者育成工学系大学院教育プログラム（PED）全体の継続的な進化と発展」ということで関東工学教育協会賞（業績賞）を受賞しました。そして大学院のさらなる教育改革に向けて、理工学大学院教育ビジョンWGをつくり、大学院で学位（理学）を出すことを含め検討が始まっています。工学研究院では次世代の大型プロジェクトにつながるべく学際プロジェクト研究の第3期（6件）が始まり、さらに研究グループ単位での登録は

## 目次

p.2  
活動を  
ふりかえって  
p.3  
これからに向けて

p.4  
教育のハイライト

p.12  
研究のハイライト

p.20  
社会貢献と国際貢献

p.27  
組織・財務の現状

第3期(16組)、また研究に関する情報交換のためのリサーチフォーラムも動き出しました。

科学雑誌Natureにも紹介記事を書いた名教自然の精神にのっとり、工学研究院では教員の評価を廃止し、自主的な研究の展開を公にすることにより、横浜国立大学のファミリーの一員としての誇りを示すべく、工学研究院所属の教員全員が年間の教員活動報告(1ページ)を提出し、学内限定ではあるが公開に踏み切りました。工学研究院は先端的な研究を展開し、大学院教育、学部教育を順調に発展させてきているといえるでしょう。

## 2013年度に向けて

新工学研究院長 河村篤男



2013年4月1日から工学研究院長に就任しました河村でございます。この場をお借りして向こう2年間の活動計画などに関して述べてみます。第二期中期目標(2010-2015)の範囲内で工学研究院の活動度をあげ、元気の出る工学研究院を実現すべく、次の方針を所信として示しました。『これまでの改革路線は尊重し、教育研究に関しては、“研究大学の理工系大学院”を目指します。』具体的には、次の4つです。(1)魅力ある研究院の将来像を策定する。(2)適材適所の考えにより、教育、研究、社会貢献、アドミにメリハリをつける。(3)グローバル化に対応した教育と研究を実施する。(4)意見を広く求む。これらは公約ですから、初心忘れずの気持ちで取り組んでいきます。

さて、2012年10月から始まったミッション再定義の作業は終焉を迎えました。要点だけを述べます。横浜国大の理工系大学院の教育の質は最上位と判断されました。研究の質についてもある程度の評価が得られましたが、研究大学院を目指すには、より一層の努力が必要です。さらに、2013年7月現在で直面している最大の課題は、工学府の改組です。2015年3月に理工学部が完成しますので、その後の大学院の姿を現在検討中です。いろいろとご協力をお願いすることになりますので、よろしくお願ひします。